

エッセイは百人百様の内容が要求される

- ダメな傾向①；事実や印象を単純に羅列する
- ダメな傾向②；テーマがあいまいだと、理屈が並ぶ
- ダメな傾向③；わかり切った一般論の展開
- ダメな傾向④；目頭に「いいわけ」、末尾は「抱負」

読み手が同感する文章と、共感する文章との違い
文章と文章の間、ことばとことばの間にもスキ間風を
うまい文章には主語がなく、非論理的……

取合せの妙で、物事は面白く変化する
個性的、独創的なエッセイを書くための近道

インタビューは、相手の触れられたくないところに踏み込んで、思わぬ言質
や新しい情報をとるべき。

自分がどんな人間かを知りたければ、エッセイを書くといい。自己の体験を見直しなが
ら、自分自身をあらためて考え、新しい自分を発見するのだ。自分自身を書く材料にし
なければならぬところが厄介なのだ。寄りかかれるものは自分しかないのだ。ある一
種の修行ともいえる。これは教育的にも望まれることであろう。エッセイの効用である。

知識のみならず人生で培ってきた感性も動員して自己を客観化してとらえながら書く
ので、文章は全人格的なものとなる。良質なエッセイは多くの人の共感を呼ぶもので、
単なる身辺雑記や知性の見せびらかしであってはならない。プロの作家の中にもエッセ
イの名手は少ない。

< 2つのチェックポイント >

一つは、書きたいことをしっかり支えてくれるエピソードを探し出して使うこと。もう一つは、
表現を具体的にすることだ。

< 小論文 >

・小論文は、テーマに対してどれ程の知識があり、どう理解しているかを筋道立てて示
す。

・答えとしての小論文を書くときは、課題文の筆者に向かって『あなたはこう主張す
るメッセージをくれました。私（学生）はそれに対してこう考えます。理由はつぎのよう
な点です』と、気楽に対応することだ」と。

書き方としては、小論文の冒頭部分で、課題文を私（学年）はこう理解したと数行で明
言することだ。明言がそのまま、課題文全体の趣旨を短縮した“要約”になる。要約した
ことで課題文の問題点が明確になり、同時に答えるべきポイントも明確になる。課題文と
書き手のスタンスもはっきりする。そのうえで持論を展開していけば、自然と一つの解答
になるのだ。

・社会問題となっていていり事象が課題（「憲法」、「ニート」・・・）

- ①課題の定義と一般的な原因と現状
- ②その実情にどのような対策がとられてきたか

- ③対策の成果が実情にどう反映して問題が改善されているか
④このような状態なので、将来はこうあるべきだという結論、提案

・質が高い小論文を書くコツ。数字や固有名詞を覚えて使うことで具体性が出てくる。

ダメな傾向①；事実や印象を単純に羅列する⇒小学生の作文（～した。）

・「ポイントを絞る」コツを述べよう。まず、与えられた課題について、最もおもしろく感じたことを、なぜこのときに限ってそう感じたか、類似の他の経験とどう違ったかをくわしく分析して、そこに重点を置いて書く。そして、自分が最もいいことと無関係な要素を削っていくと、一つのヤマができる。

ダメな傾向②；テーマがあいまいだと、理屈が並ぶ

・学生たちに「誠実」「好奇心」「思いやり」「礼儀」「優しさ」「人間関係」などの抽象的な課題を出すと、無味乾燥なエッセイになる。書き手の考えや人柄にハッとさせられ嬉しくなるものは少なく、読んでいて苦痛を感じ、どうコメントをすればいいのかわからなくなるものが多い。

ダメな傾向③；わかり切った一般論の展開

・だれもが知っている一般論を並べたてる傾向は、平凡でだれもが共通の思いをいただきやすい課題のときに出る。例えば「友人」「恩師」「親」「読書」「休日」などである。「趣味」が課題だとすると、学生たちは野球、サッカー、音楽、映画、書道、デザインなど自分の好きなことのメリットを解説してくれる。ありふれた例として、自分は小学校からサッカーをやっていて、運動をしない友人よりも体力があり、友だちの輪も広い、将来はイギリスのプロチームに入って活躍したいと夢を語る。

趣味のない学生は、一般論的な趣味論を書く。「趣味はそれぞれの人の価値観、考え方、性格により異なってくる。でも生きていくうえで、とても必要なものである。音楽鑑賞が好きな人は、音楽を聴くことで安らぎを得てストレスを発散できる」。このような具合である。

これを読むと、「その通りですネ」と同感するだけで、何もコメントできない。読後になんの共感も残らないからだ

ダメな傾向④；目頭に「知らないいいわけ」、末尾は「(良い子ぶって) 抱負」

<客観的な描写>

例えば、「花は美しい」と主観的に説明する代りに「何の花が、どのような場所や光線の中で咲き、花の色や香りが周囲にどんな風にうまく調和しているか」などを細かく具体的に客観的に描写すればするほど、花の美しさは、読む人に伝わってくる。「下町の平屋の庭で朝顔が咲いている。みずみずしい青紫色が古びた石塀に映えている」といった具合だ。いい方を換えると、単に「花は美しい」と説明されても、読み手は、「ああ、そうですか」と反応して終わってしまう。すなわち、読み手はひとまず同感するのだ。それが、客観的な描写を重ねていくと、書き手と対象の間に「スキ間」が自然にできてくる。読み手がいつしか、そのスキ間に入り込んで、書き手と一緒にいる。花が置かれている状況や美しさまでも心に描きながら、書かれている内容に**共感する**のだ。

文章教室で私は「物事をひと言で説明してすまさないように」と再三、声を大きくしている。客観描写 — 対象とのスキ間 — 風通しのいい文章 — わかり易い文章、の関係ができるからだ。（「説明より描写」「主観より客観」「接続詞多用はスキ間なし」）

<良いエッセイの例>

好奇心

受験勉強を終え卒業を間近にした中学生の私は高校生活に向けてひとつの野望を燃やしていた。「……思いっきりはじけてやる！！」中学の時どちらかという地味だっ

た私は秘かに「高校デビュー」をしようと心に決めていた。そして入学すると同時に髪を染めピアスを開け短い制服のスカートをさらに中に折りこんで短くした。そして同じような外見の友達を得、私のデビューはめでたく成功した。中学の頃の私を知っている人達は冷たい視線をくれたり陰で何か言ったりしているようだったが私は全然気にしなかった。むしろ、はじけてる私がかっこいいからあんたたち悔しいんでしょくらいに思っていた。

お酒、タバコ、一晩中遊ぶこと、全てが初めてすることでとてもワクワクした。友達とゲーム感覚でする万引きのスリルにも楽しんだりした。そして……・当時「お水の花道」というドラマでも放映されていてひそかにあこがれていた「キャバクラ」というものにも足を踏みいれてしまった！ でも、それが私のギャルをやめようと思う決め手となった。友達は、「ただおっさんと話すだけだから楽だよ。絶対あぶないことされないし」と言っていたが私はそのただ話すことがめちゃくちゃ苦痛だった。酒くさいおっさんが話す下ネタにあいづちをうつ……私は何をやってんだ？ そしてあげくのはてには太ったアニメが好き系の男にいきなりだきつかれた！ 友達に「嘘つきー！」と心の中で叫びながら好奇心だけでこんな所に一日でもきてしまった自分に後悔して男をなぐつて店をでた。

帰りながら、「もうギャルはいいや……」と思った。

思いかえすと若げの至りだったと笑えるが、大人になった今、そういう幼稚な行動をとろうとは思わないからそれだけでもよしとしよう。どんな経験でも無駄にはならないのだ。親には言えないけど。

<自分のことがうまく書けない>

自分のことを書く、しかも読み手がいると仮定すると、そう簡単にはいかない。身近にいる学生は一、二年後には就職試験をひかえていて、エントリーシートには自己PRを書かなければならない。わずか二千字程度のものだが、多くの学生は満足に書けない。

多い例が、「高校、大学を通じて一つのスポーツに打ち込んできた。だから、体力には自信があり、他人との協調性、社交性もあり、その上、忍耐強い」とPRする。もう一つは、「大学時代にファミリーレストランや居酒屋で三年間もバイトを続け、責任も持たされた。接客業に自分は合っているし、仕事もでき、人ともうまく折り合える。意見をよく聞き、よく発言もする」。これこれをしたから、こうできると、非常に短絡して書くので、私はよく、「これで他人は信用して評価してくれると思うのか」「唐突に感じることさえある」「世の中はそのように簡単で単純なものか」と、疑問をぶつける。全般的に自分をPRするのは苦手のようなのだが、その原因は、日ごろからの客観的な自己分析が不十分なためであろう。では、**どうすれば効果的なPRになるのか**。例えば、「高校時代は同じスポーツをやっていた仲間と同じ練習をこなしたが、大学以降は、自分で工夫した練習メニューを続けて持久力をつけたこと」を、細かく**具体的に書いて**、いかに自分が努力の人間であるかを強調する。バイト関連では、あるとき、非常に困った特異な問題がバイト先で起り、それをどう克服したか、その事態を冷静に具体的に克明に描写することだ。自然に**人との違い**が出てくる。書き手が自分自身をどのようなスタンスで見つめ、判断し、行動できるかを読み手は察するものだ